



## Kernel通信

神戸大学附属図書館 電子図書館担当

---

(Issue Date)

2024-02-27

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486364>



# Kernel 通信

第 30 号 (2024 年 2 月)



2007 年の『Kernel 通信』創刊から 17 年が経過し、『Kernel 通信』は 30 号を迎えました。  
今後も学術成果リポジトリ **Kernel** と『Kernel 通信』をよろしくお願いいたします。

## インタビュー 鈴木雅子 附属図書館事務部長

Kernel 通信では研究者の方々に、普段のご研究の内容や方法、図書館のサービス等についてご意見を伺い、紹介しています。  
今号では、G7 で即時オープンアクセス（以下、OA）の方針が出されたこともあり、特別編として、附属図書館の鈴木雅子事務部長に機関リポジトリ・OA を中心としたインタビューを行いました。



本インタビューでは、2023 年 5 月に開催された G7 仙台科学技術大臣会合の声明書に公的資金による学術出版物とその根拠データに対する「即時 OA」の方針が盛り込まれたことに端を発する 2025 年度新規公募分からの「即時 OA 義務化」方針を中心に、近年の大学における OA への取組や、出版社の動きなどについて、2005 年ごろから機関リポジトリや OA に関わってきた鈴木部長に若手職員からの質問に答えるかたちで解説を依頼しました。

インタビュー内では、2024 年 1 月時点で分かっていることとして、

- ・ 科研費等の競争的資金について、2025 年度新規公募分からその成果物である論文と根拠データの即時 OA が義務化されること
  - ・ 対象となる論文は査読付き学術ジャーナルに投稿・アクセプトされた論文であること
  - ・ APC を支払って出版社の Web サイトで出版社版を公開しても、機関リポジトリで著者最終稿を公開しても構わないこと
- などが挙げられました。

また 2023 年 1 月から開始している Springer Nature 社とのパイロットプロジェクトについての現況や、今後の学術論文の在り方などについての話題も取り上げています。

即時 OA 義務化についてはまだ詳細が不明な点も多いですが、今後の参考として、ぜひインタビュー全文をご覧ください。

 インタビュー全文

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486364>

## 特集： オープンアクセスの動向（II. 海外編）

今号の特集では、海外におけるオープンアクセス（OA）の動向をご紹介します。主に欧米の OA に関する動きについて特に学术界と出版界の動きを中心にまとめました。なお、日本国内の OA 動向については『**Kernel 通信**』29号に掲載していますので、ぜひあわせてご覧ください。

### ！ 即時 OA 方針とプラン S

2022年8月、アメリカが公的資金を利用した研究成果について「即時 OA」の方針を打ち出しました。「即時 OA」とは、研究者によって執筆された論文が学術ジャーナル上に発表されると同時に OA となることで、この方針の実施によってエンバゴ等の遅延なく、市民を含む誰もが無償で公的資金によって生み出された研究成果にアクセスできるようになります。この即時 OA の端緒となる方針は 2013 年の時点で既に米科学技術政策局（OSTP）から研究助成機関に向けて通知されていましたが、長年音沙汰がなく、10 年近く経過してようやく既存の方針の改定・強化が行われ、2022 年の発表と相成ったようです。具体的な動きを伴う即時 OA をめぐる策定は今回が初めてではなく、これに似た試みはすでにヨーロッパ諸国のコンソーシアム（cOAlition S）による「プラン S」が 2018 年から推進されていました。欧州の運動にけん引される形で、米国が重い腰を上げたと言えるかもしれません。

欧州のプラン S は、同コンソーシアムに参加する団体が助成して作成された研究成果について、「論文が出版されると同時にオンラインでアクセス可能となる OA ジャーナルへの掲載しか認めない」という方針を軸とするかなり強硬的な内容で、当初より「学問の自由に反する」「伝統・権威のある学術雑誌への投稿が制限され、若手研究員のキャリアに影響する」等懸念の声が上がっていました。つまり、プラン S に参加する研究助成機関から助成金を得ている研究者にとっては、自らの論文の投稿先が制限される（ゴールド OA ではない購読誌やハイブリッド雑誌に投稿できない）ことを意味し、これは中々洒落にならない話なのです。と言うのも、大手出版社が刊行している伝統や権威のある学術雑誌とは、学界におけるいわばブランドであり、研究を行う人々にとっては自分の論文が掲載された雑誌のネームバリューがそのまま研究者としての評価につながるため、投稿・掲載できる雑誌が制限されるというのはキャリアへの致命傷になりかねないからです。

ここで用語の説明をさせていただきますと、OA ジャーナルとは最初からアクセスフリーの論文だけを収録した電子ジャーナルのことで、基本的に購読料が入らないため、出版における費用は著者による論文出版料（Article Processing Charge, APC）によって賄われます。一方で、ハイブリッドジャーナル（実は学術雑誌の内訳の約半分を占める多数派なのですが）とは、基本的には購読誌という体裁で、著者が OA 掲載料を払った場合にのみ、その論文を OA として扱うという措置を取っています。これは一見合理的なようですが、結果的には出版社が掲載料と OA 料金の二つを懐に入れることになる制度で、主に APC を捻出する助成機関から「出版料の二重取りではないか」というような批判がなされています。こうした雑誌に諸機関の経費が流れないよう、また学术界の OA がより促進されるよう、対策として打ち出されたのがプラン S だったのです。

面白くないのは当然出版社で、いわゆるトップジャーナルを多く発行する Springer Nature、Elsevier といった大手出版社によるプラン S への根強い抗議が続いています。これを受け、プラン S では暫定措置として「転換契約に応じた出版社のハイブリッド雑誌を例外的に投稿可能なジャーナルとして認める」ことが考案され、いずれは完全 OA になることを約束したうえで、一定期間はハイブリッドの形態でも APC を得られる猶予が与えられました。この転換が意味するのはもちろん「購読誌」から「OA 雑誌」への転換です。

## ！ ペイウォール（購読料の障壁）と Sci-Hub

Sci-Hub というウェブサイトをご存じでしょうか。トップページを覗いてみると、壁面を背景に鍵を啜えたカラスらしき黒い鳥が鎮座しており、いかにもアングラな雰囲気醸しています。しかし運営費はユーザーからの寄付金で賄われているらしく、そこに広告の類は見当たりません。これは、2011 年にカザフスタンの大学院生 Alexandra Elbakyan が立ち上げた論文版海賊サイトで、ここに集まった利用者はライセンス料を支払うことなく、論文を自由にダウンロードすることができます。出版社と購読契約を結ぶ大学に所属している協力者から認証情報を入力し、論文を収集するという仕組みで、現在のサイトの論文公開数は 8800 万本以上にのぼっています。しかしこのようなウェブサイトは当然ながら著作権の観点からも、出版社との契約の観点からも違法なものであり、実際これまで Elsevier を始めとする世界各国の出版社から幾度も著作権侵害で訴えられ、多額の損害賠償の支払いとサイトの永久閉鎖を命じられています。しかし、Sci-Hub はミラーサイトによる分裂を繰り返し、アクセス可能な状態を維持したまま今に至っています。あらゆる学術雑誌出版社からは目の敵にされ、排斥、糾弾等を受けているウェブサイトではありますが、その一方で高額な購読料を払えず主要な論文にアクセスできない若手研究員や学生からは熱い支持を得ており、「学術情報からペイウォールを取り払う」というある種の義賊的理念を持つ当サイトを好意的に見ている学術コミュニティも多く存在するのが実状です。

Elbakyan 氏のような過激な手段を取らないまでも、出版社による学術情報の囲い込みを問題視する傾向は電子ジャーナルの勃興以前から続いていました。論文を執筆し、それを査読し、掲載した雑誌を他の研究者が読み、また新たな知見を生み出すというサイクルを形成しているのは研究者たちなのに、そのプラットフォームの単なる主催者であるはずの出版社が利益を享受しすぎであるというのがその主な主張です。言い方は悪いですが「強固で搾取的なシステムの上にあぐらをかく者」として出版社を敵視する人々はかねてより一定数いました。そしてその中のひとりの研究者が実際に行動を起こした結果、Sci-Hub という違法なプラットフォームを生み出す形になったのです。私見ではありますが、プラン S が「論文のオープン化」をあくまで出版社との協力のもとで推進しているのも、Sci-Hub のようなサイトを野放しに出来ない背景があるからかもしれません。

## ！ 今後の展望

近年、APC ベースのゴールド OA とは異なる「ダイヤモンド OA」と呼ばれる新しい形態も注目されています。これは、簡単に言えば購読料も APC も徴収しない OA 出版モデルであり、大学出版会や学会などの NPO が助成機関から運営費を援助してもらうことで OA を実現しています。今後、こうした NPO と政府支援をベースとした学術インフラの構築に成功すれば、出版社の利権から独立した真にオープンな出版システムが出来上がる可能性があり、この先の動向に期待が高まります。権威ある購読雑誌のブランド力に変わる評価指標と、ダイヤモンド形態のまま資金をやりくりする持続力、これらの確立がまず試金石となるのではないのでしょうか。

## ！ 参考文献

### ○ 米国の即時 OA について

- ・ 脇谷史織. 米国・OSTP による研究成果公開に関する政策方針について. カレントアウェアネス-E. 2022-12-22, (449), E2564. <https://current.ndl.go.jp/e2564>
- ・ OSTP Issues Guidance to Make Federally Funded Research Freely Available Without Delay. The White House. 2022-08-25. <https://www.whitehouse.gov/ostp/news-updates/2022/08/25/ostp-issues-guidance-to-make-federally-funded-research-freely-available-without-delay/>
- ・ 船守美穂. 米国、即座 OA の方針を発表. RCOS 日記 - miho チャンネル. 2022-08-27. <https://rcos.nii.ac.jp/miho/2022/08/20220827/>

○ プラン S と購読料について

- ・船守美穂. プラン S 改訂—日本への影響と対応. 情報の科学と技術. 69(8), p.390-396. 情報科学技術協会.  
[https://doi.org/10.18919/jkg.69.8\\_390](https://doi.org/10.18919/jkg.69.8_390)
- ・船守美穂. プラン S 改訂版発表後の展開—転換契約等と出版社との契約への影響. カレントアウェアネス-E. 2020-12-20, (346), CA1990. <https://current.ndl.go.jp/ca1990>
- ・エルゼビア社が掲載料引き下げを拒否したことに対し、学術委員全員が辞任, Medical English Service. 2023-05-20.  
<https://www.med-english.com/news/vol124.php>

○ Sci-Hub について

- ・鳥井真平. 論文海賊版サイト、日本の違法ダウンロード 720 万件 5 年で 5 倍超. 毎日新聞. 2023-06-06.  
<https://mainichi.jp/articles/20230605/k00/00m/040/113000c>
- ・粥川準二. 海賊版論文サイト サイハブ / Sci-hub をめぐって. エナゴ学術英語アカデミー.  
<https://www.enago.jp/academy/sci-hub/amp/>
- ・八田真行. 見えない巨象としての Sci-Hub. Yahoo!ニュース. 2021-05-31.  
<https://news.yahoo.co.jp/byline/hattamasayuki/20210531-00240748>
- ・学術論文を無料で公開している海賊版サイト「Sci-Hub」の運営者へのインタビュー. GIGAZINE. 2021-05-05.  
<https://gigazine.net/news/20210505-an-interview-with-sci-hub-alexandra-elbakyan/>

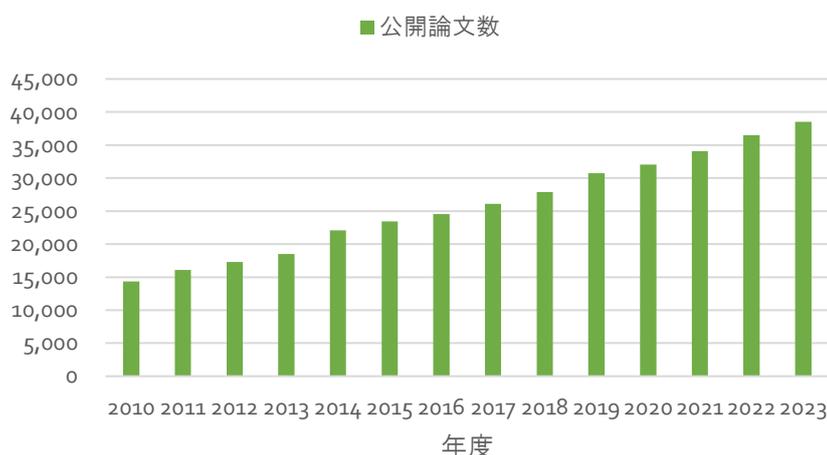
## Kernel ニュース

2023年6月、G7広島サミットおよび科学技術大臣会合を踏まえた「**統合イノベーション戦略 2023**」において、公的資金によって進められた研究成果の即時オープンアクセス（OA）化の方針を策定することが盛り込まれました。これを受けて、総合科学技術・イノベーション会議は同年10月に「**公的資金による学術論文等のオープンアクセスの実現に向けた基本的な考え方（案）**」を公表しました。

同案によると、即時OAの対象となる研究成果は、1) 2025年新規公募分以降の 2) 競争的研究費制度（科研費等）を利用した研究成果のうち 3) 査読付き学術論文およびその論文の根拠データ となる方針です。

また同案では「論文及び根拠データの学術雑誌への掲載後、即時に機関リポジトリ等への掲載を義務づける」としており、現状「即時」の具体的な定義は不明ですが、上記に該当する学術論文およびその根拠データについて、今後はAPCを支払って出版社版をOAにするか、あるいは出版社が許諾したバージョンの原稿を機関リポジトリ等でOAにするかを選択する必要がある模様です。本テーマについては、今号の「**Kernel インタビュー**」でも取り上げていますので、ぜひそちらもご一読ください。

## Kernel 統計（公開論文数の推移）



2024年1月末現在のKernel公開論文数は、38,535件で昨年度から約2,000件増加しています。

また「Unpaywall」のアドオンをブラウザにインストールすることで、Kernelで公開しているファイルに論文出版社版のページからアクセスできるようになります。ぜひご利用ください。

<https://unpaywall.org/products/extension>

Kernel 通信 第30号 2024年2月27日 発行

神戸大学附属図書館 電子図書館担当

特集 山下（オープンアクセス推進WG）

インタビュー協力 荒川、伊藤、佐桑、谷口、福富、和田（オープンアクセス推進WG）

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町2-1 社会科学系図書館3階

Email : [repo@lib.kobe-u.ac.jp](mailto:repo@lib.kobe-u.ac.jp) Tel : 078-803-7333 Fax : 078-803-7336